The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「水のしら浪なる御有さま」考 : 『狭衣物語』（巻四）の本文分析
Author(s)	小林, 理正
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2021, 55, p. 43-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「水のしら浪なる御有さま」考

――『狭衣物語』（巻四）の本文分析――

小林　理正

キーワード：本文分析／本文読解／表記情報／本文揺動史／引歌

一　問題の所在

『狭衣物語』巻四之下。斎院となり、もはや簡単に会うことすら叶わない源氏の宮へ涙ながらにその胸中を吐露する狭衣を描く場面がある。そのシーンに次のような一幕がある。

○　承応版本・巻四之下・六丁表～裏[1]

あさましき御こゝろの内のかけ〳〵しきかたざまをば、今はいかなり共おぼしよるべきならねど、水のしら浪なる御有さまを、雲のよそにのみ思ひやりきこえさせたまはむには、「ながらへぬべからんいのちのほどなりとも、いかゞ」とおぼしつゞけて、月のかほのみながめさせ給ひけり。

注目するのは傍線部「水のしら浪なる御有さま」の一文である。検討の都合上、当該本文が付置される文脈理解を

簡単に整理すると、〝いまとなってはどうとも思いをお寄せになれるはずもないけれど、水の白浪であるご様子を、はるか離れたところからばかりお気にかけなさるには、「生き長らえることのできるこの命であっても、どうしたものか」と思われ続けて〟とでもなろうか。いま「水のしら浪なる御有さま」については、あえて字句のとおり読み解いたが、たとえば『新編日本古典文学全集』（小学館）[2]は当該本文を「古歌にも「水の白波立ち返り」とあるように、見ても満ち足りることのない斎院の美しいご様子を」（②・三四七頁）と解釈している。その解釈からも明らかだが、同書は「水のしら浪」が次の『古今集』歌を引くとしている。なお、このことは頭注に明記されている。

○『古今集』・巻一四・恋歌四・六八二[3]

（題しらず）　　よみ人しらず

いしま行く水の白浪立帰りかくこそは見めあかずもあるかな

なるほど、「水の白浪」とある。また、幾度となく見たいと思うほど素晴らしい源氏の宮の姿であったろうから、挙例歌を持ち出すことで狭衣の「かくこそは見めあかずもあるかな」な有り様を的確に表現したとみることもできそうである。実際、『古今集』歌（以下、「いしま行く」歌）を引く表現は『栄花物語』巻三九・「布引の滝」に見える「御おぼえ、月日に添へて「水の白浪」にのみなりまさらせたまふ」（『新全集③』・五〇〇頁[4]）のごとく存在していることもあり、通行する注釈書の理解を安易に斥けることはできない。だが、源氏の宮の姿を簡単に見られなくなったことを嘆き、その命さえどうしたものかと思案する狭衣の在り方は、自分自身の行動に対する悲歎のようにも見え、どこか違和感を覚えてならないのである。というのも、たとえば以下に掲げるような例を『狭衣物語』にいくつか見出せるからである。

○　承応版本・巻二之下・一九丁表～裏[5]

かうのみひとへに明くれ見奉り給ふまゝに、心ぎもをのみくだきつゝ、いひしらぬことのは、けしきをも、ひと所の御めにもみゝにも、みしらせ聞え給へど、そのけしきをゆめにもおもひよるべくもあらずもてなし給へり。さすがに、「あながちなるさまにて見奉らん」とおぼさば、は山のしげりがたかるべきにもあらず。されど、とのなどのおぼさん事も、いとうたて思ひやりなき心地のみして、思ふまゝにもみだれ給はぬまゝに、たゞ心ひとつにのみくだけつゝ、つれなく過し給ふなるべし。

狭衣は、朝夕ひたすらに源氏の宮のことを見るにつけても心を砕き、彼女に何とかして自身の思いを伝えんとしている。だが、源氏の宮は傍線部から分かるように気づいていない体を装うのである。(6) その有り様に対して、狭衣は父堀川大臣のことも頭をよぎるが、波線部のように我が心一つに思い悩む。——表面にはその感情を出さず、過ごすのである。肝要なのは、源氏の宮を見たことで狭衣は懊悩しているのであって、会えなくなること、あるいは離れたところから見るだけになることを嘆いているわけではない点である。この狭衣の在り方を踏まえるとき、「水のしら浪なる御有さま」が「いしま行く」歌を引くとする解釈は狭衣の人物造型との間に不和のあることに気付かされる。もちろん、作中人物らも物語の進行とともに成長するだろうから、いつまでも同じ人物造型であるとすることはできない。だが、こと源氏の宮をめぐる狭衣の在り方は全巻つうじて一貫している。それゆえ、「水の白波なる御有さま」の一文が「いしま行く」歌を引くと読み解く通行する解釈を認めたときに生じる違和感を否定してよいものではないと思うのである。

そこで本稿では、如上の問題意識のもと、「水のしら浪なる御有さま」の一文を改めて分析し、当該表現の引歌理解の成否、およびその解釈の整訂を試みる。

二　従来説整理

「水のしら浪なる」を通行する注釈書は、いずれも「水の白波なる」と校訂している。底本に採用した伝本の表記に差があるだろうが、「水」と校訂する点、諸注の間に揺れはない。また、同表現が「いしま行く」歌を引くとする点も諸注一致している。それゆえ、その解釈はいずれも極めて似たものとなっている。しかし、解釈史および注釈史を辿ってみると、その理解が揺れていた事実が浮かびあがってくる。以下、通行する注釈書の解釈を整理し、注釈史を押える。(7)

『全譯』は「岩間ゆく水の白浪の再びたちかへり見ることができないかと思われると」（二三七頁）と現代語訳し、「御有さまを、雲のよそにのみ」との本文を訳出しない、大胆な解釈を採っている。そのほか、『大系』は「何時でも繰返し見たく思われる源氏宮の御有様を、宮中からだけ空しく思いやり申しなさって、お逢いなされないとしたら」（【頭注七】四二八頁）と読み解くし、『全書』は「せめて今宵程度には繰返し見たく思ふ、見ても〳〵飽きない美しい源氏宮の姿態を」（【頭注一六】・二四九頁）と解釈するし、『集成』は「見ても見飽きず、つねに見惚れずにはいられない斎院の美しいお姿を」（【頭注二】・三一六頁）との理解を示している。また、どのように解釈したか、その詳細は示さないものの『有朋堂』は頭注にて「跡もなきの意なるべしといふ」（四九一頁）と指摘しており、その他の注釈書とは一線を画す理解を示している。『有朋堂』を除く通行する注釈書は、いずれも「水のしら浪なる御有さま」に「いしま行く」歌が引かれると理解しているとみて、まず間違いない。ここに解釈の揺れを認ることが可能なわけである。なお、『有朋堂』の見解は取り立てた批判に晒されることもないままに退けられている。大方の理解が「い

しま行く」歌を引くとすることをもって、これとは異なる理解を否定してよい道理はないのだが、いまとなっては『有朋堂』の理解は謬説として認定されている感がある。もちろん、「いしま行く」歌を踏まえるとする解釈も充分な検証がなされたうえで支持されているわけではない。(8)――通行する理解は、いまなお明確な回答が得られていない状態にあると考えるべきである。

ここまで現代注の解釈をめぐる問題を確認したが、次は古注釈書の見解について整理しようと思う。(9)古注釈に見出せる解釈が如何なるものか整理することで、「水のしら浪なる御有さま」をめぐる解釈史を押える。まずは『狭衣下紐』からである。『下紐』は「水の白波なる御有(あり)さま」と見出し本文を作り、「跡もなき心なるべし　源氏宇治ノ巻ニ有」（五六四頁）と注している。この『下紐』に強い影響を承けて成立した『文談』は「水の白波」と見出し本文を立て、「源氏宇治巻に有跡なき心なり」（「四の下」・二一丁表）と注している。『校注』は「水のしら波」（「人」（三冊目）・二二丁表）と見出し本文を付ける。その注記内容は『下紐』説を記したのち、「雲のよそにのみ思ひやりきこえさせたまはむには、「ながらへぬべからんいのちのほどなりとも、いかゞ」とおぼしつゞけて」とあった箇所に寄せて、「水のしら波」の解釈を試みており、独自色が強い。右の整理からは『下紐』にみえる「跡もなき心なるべし　源氏宇治ノ巻ニ有」との注記が、後の古注釈書に継承されていた実態が浮かびあがる。

なお、「跡もなき」とある本文を宇治十帖に見出すことはできない。「水の白波」とある例も宇治十帖には見当たらない。「水のしら浪」に代って、「柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波」（『新全集』⑤・二八二頁）(10)という一文を総角巻に見出すことができる。この「跡の白波」は、以下に掲げる歌を引くとされ、当然ながら「いしま行く」歌を踏まえない。

○『拾遺集』・巻二〇・哀傷・一三二七（『拾遺抄』・五七六／『古今六帖』・一八二一）

題しらず　　沙弥満誓

世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪

仮に『下紐』『文談』『校注』が挙例歌を引歌と認定していたとしよう。そうなれば、非引用歌句が喚起されることになるから、「水のしら浪なる御有さま」とあった『狭衣物語』の文脈に全く馴染まない。つまり、解釈上の不審が残ることになるのである。したがって、上述した三つの古注釈書の理解を支持することはできない。

ここまで古注釈書間に継承されていた『下紐』説に問題のあることを確認してきた。『有朋堂』の解釈は、この『下紐』説を採っていたこと明らかであるから、その解釈は誤りであると言わねばならない。

『下紐』とは異なる見解を示した古注釈が一つある。『狭衣抄』である。同書は「水のしら波なる」と見出し本文を作る点は他の古注釈と同様だが、注記内容は「いしま行く」歌を引いたのち、「斎院をたちかへり見たくおぼしめす心よくかなへり」（六一〇頁）とある。当該注記は〝斎院（源氏ノ宮）を幾度も見たく思われる（狭衣ノ）心（ト）うまく合致している〟とでも読み解けようか。肝要なのは、この解釈が『大系』『全書』『集成』『新全集』の解釈に通底するものである点だ。つまり、昭和・平成に刊行された注釈書の多くが示した解釈は、近世期において『狭衣物語抄』が示した理解を全面的に採用したものであったのである。『狭衣物語抄』の見解を批判的に受け止めたうえで、現在の通行する解釈が成立したと思いたいが、狭衣の人物造型を思うとき、そこに不審が残ることは既に述べたとおりである。それゆえ、『狭衣物語抄』の理解もまた安易に是とすることはできない。

ここまでをまとめる。本節では解釈史および注釈史の整理を行った。その結果、古注において二種の見解が存在したが、現代注になると、二種あった解釈がほぼ一元化し、『狭衣抄』に見出せる理解が支持されるようになった、と

いう史的変遷が浮かびあがってきた。しかし、稿者の抱く「水のしら浪なる御有さま」をめぐる不審は、いまなお解消されていない。この「水のしら浪なる御有さま」の解釈整訂を目指すためには検討本文そのものを改めて分析する必要があるのだろう。

三　「水のしら浪なる御有さま」の本文史

「水のしら浪なる御有さま」は如何に解釈すればよいのだろうか、この疑問を解消するため、本節では当該表現の本文史をまとめようと思う。巻四については、中田剛直『校本　狭衣物語』（桜楓社）がないため、確認し得た伝本によって、そのヴァリエーションを整理する。まずは鎌倉写本群の本文である。(11)

【鎌倉写本群】

○　為定本「みつのしらなみなる御ありさま」
○　慈鎮本「みつのしらなみなる御ありさま」
○　松浦本「みつのしらなみなる御ありさま」
○　為相本「みつのしらなみならぬ御ありさま」
○　為秀本「水のしら波なる御ありさま」
○　為家本「水のしらなみなる御ありさま」
○　為明本「水のしら浪なる御ありさま」
○　清範本「みつのしらなみなる御ありさま」

一見して明らかなように、為相本のみ「みつのしらなみならぬ御ありさま」とあって、意味上、「みつのしらなみ〝ではない〟「御ありさま」と読み解ける。この形では「みつのしらなみ〝である〟「御ありさま」とあった諸本と解釈が真逆になってしまう。この点は大きな違いとして認められるであろう。「る」を「ら」と読み誤り、そのために生じた「なら御ありさま」との本文を不審に思った書写者が「ぬ」を補い、「ならぬ」との異文を生じさせたか。そのほかは「みつ」「なみ」を平仮名に開いて記すか、「水」と、「波」あるいは「浪」と漢字で表記するかの差が認められる程度となっている。この違いは『狭衣物語』の本文揺動の有り様から見れば些事であることは間違いない。しかし、「みつ」と表記される場合、その本文理解は「水」と「御津」の二とおりに読み解くことができる。それゆえ、「みつのしらなみなる御ありさま」とあるとき、我々は「水の白浪なる御有り様」あるいは「御津の白浪なる御有り様」、そのどちらで読み解かねばならないのか、正確な本文分析をつうじて決しなければならないのである。にも関わらず、前節にて確認したとおり、古注釈および通行する注釈書は「御津」の可能性を全く考慮してはいない。この事態は、写本の文字表記で「御津」と記したものがなかったことに起因すると推察される。本文の表記情報に振り回される読解研究の問題をここに見出せよう。

次は室町期以降の本文群を確認する。その本文は鎌倉写本群の本文の揺れ幅にいずれもおおよそ収まるが、[12] 蓮空本および飛鳥井雅章本は、その形態が若干異なる。蓮空本は「名のしらなみなる御ありさま」とある。このままでは意味不通である。損傷本文と判断してよかろう。とはいえ、蓮空本の損傷は【水】と【名】の草体が似通うことで生じた誤写と思しいから、作者でもあり、読者でもあった享受者らが異なる表現世界の形成を試みた結果の異同であるとみることはできない。飛鳥井雅章本には「みつのしらなみなる御心ありさま」とあって、「心」の一字が加わっている。「みつのしらなみ」とある箇所については、既出のヴァリエーション中に収まるが、「心」の一字は明らかにその

転写過程で加えられたと判断できる。ただし「御心ありさま」という表現には、たとえば『源氏物語』浮舟巻に「防ぐべき人の御心ありさまならねば」（⑥・一〇六頁）とあったり、『栄花物語』「花山たづぬる中納言」に「梅壺はおほかたの御心有様なども奥深く心にくくおはします」（①・一〇一頁）とあったりするようにいくつか用例が存在している。筆の勢いに任せて「心」の一字を書き加えたとしてもおかしくはあるまい。それゆえ、飛鳥井雅章本が独自の本文世界を形成しようと試みたのか否かについては、その判断が難しい。

ここまで「水のしら浪なる御有さま」の本文史を確認してきた。当該本文は鎌倉期から近世期に至るまでほぼ揺れ動くことがなかったらしく、その揺れ幅は極めて小さいものであったと分かる。そのためか、これまで充分な本文分析がなされてこなかった。しかし、一顧だにされてこなかった表記差の問題が、実は二とおりの解釈を可能にする違いであったのである。これらを踏まえるかぎり、「水のしら浪なる御有さま」の一文は再検討せねばならない本文といえる。

四　「御津の白浪なる御有り様」か

前節の検討をつうじて「みつ」が「水」「御津」の二とおりに読み解ける可能性のあることは確認できたかと思う。従来、「水のしら浪なる御有さま」は「水の白浪なる御有り様」と校訂し、「いしま行く」歌に拠ると解釈することで、幾度も見たいと思わせる源氏の宮の姿を表現した本文だと理解されてきた。しかし、「御津の白浪」という表現に注目し、平安朝文学から用例を捜すと、次に掲げる歌を見出すことができる。

○『万葉集』・巻一一・寄物陳思・二七三七

大伴之三津乃白浪　間無我恋良苦乎　人之不知久

掲出歌は冷泉家時雨亭文庫本『人丸集』および書陵部本『柿本集』、『類聚古集』にも見える。冷泉家本には「おほとものみつのしらなみまなくわかこふらくを人のしらてひさしさ」（『人丸集』Ⅳ・一七三）とあり、書陵部本『柿本集』には「おほとものみつのしら浪いもをなをこふらく人のしらてひさしく」（Ⅱ・五四〇）とあり、『万葉集』との間に異同が認められる。『類聚古集』は『万葉集』と同様である。『万葉集』歌の場合と『柿本集』の場合とでは和歌解釈に若干の違いが生じるが、歌意は同趣である。注意すべきは、『狭衣物語』の「水のしら浪なる御有さま」という一文が当該歌に拠ると解釈するとき、掲出歌囲み表示部が喚起されることである。囲み表示部「間無　我恋良苦乎　人之不知久」は〝休みなく私が恋しく思うのを、あなたは知らないのです〟などと読み解ける。上述の解釈を踏まえ、『狭衣物語』の「水のしら浪なる御有さま」を「御津の白浪なる御有り様」と校訂し、これを文脈に戻してみると、〝いまとなってはどうとも思いをお寄せになれるはずもありませんが、私がいつもあなたを恋しく思っていることを知らないでいる（あなたの）ご様子を、はるか離れたところからのみ気にかけるのは、「生き長らえることのできる、この命であっても、どうしたものか」と思われ続けて〟と読み解けるようになる。源氏の宮が自身のことを顧みてくれないことを嘆き悲しむ狭衣の姿は、第一節にて確認した例の他にも、次のようなケースが存在しており、物語内において幾度か描かれている。

○　承応版本・巻一之上・三九丁表

中将の君は、ありしむろの八嶋の後は、宮のこよなくふしめになり給へるもいとつらう心うきに、「いかにせまし」とのみなげきまさるを、わが心にもなぐさめわび給て、「をのづからもやまぎるゝ」と忍びありき共に心

いれ給へど、ほのかなりし御手あたりにゝるものなきにや、をばすて山にのみぞおぼさるゝ。

「宮のこよなくふしめになり給へる」が源氏の宮の取った行動である。狭衣に胸中を打ち明けられた源氏の宮は狭衣と視線を合わそうとしないのである。そのような源氏の宮を見る狭衣は、傍線部のごとく辛く思い、嘆き悲しむのである。物語において幾度となく語られた源氏の宮をめぐる狭衣の在り方と、「水のしら浪なる御有さま」を「御津の白浪なる御有り様」と校訂することで浮かびあがる、恋しく思っていることを知らない（あるいは知らない体）でいる源氏の宮の様子を見て煩悶する狭衣の姿は重なるといえる。

たしかに源氏の宮の美しさは作中、何度も記されている。それだけに従来説にも一理あるように思える。けれども、「水の白浪なる御有り様」を見て、狭衣が自らの命さえもどうしたものかと思い悩むというのは、源氏の宮をめぐる狭衣の有り様からすれば、どこか腑に落ちない。その一方で、「御津の白浪なる御有り様」と校訂すれば、この手の不審は、たちどころに解消される。そればかりか、繰り返し語られてきた狭衣の造型と合致さえするのである。それゆえ、「水のしら浪なる御有さま」は「御津の白浪なる御有り様」と校訂されるべきであり、同表現は「大伴之（オホトモノ）」歌を引くものであったと理解せねばなるまい。

なお、「大伴之（オホトモノ）」歌は『万葉集』か、『人丸集』かによって、その形態が異なるが、『狭衣物語』には『万葉集』歌を踏まえる例が散見される一方、強いて『人丸集』を参看したとせねばならないケースはない。それゆえ、「大伴之（オホトモノ）」歌は『万葉集』あるいは同集と同じ本文の形態で享受され、『狭衣物語』において用いられた蓋然性が高い。

五　おわりに

本稿では、「水のしら浪なる御有さま」の一文の再検討をつうじて、当該表現の引歌が従来指摘されてきた『古今集』入集歌「いしま行く」歌ではなく、『万葉集』の「大伴之（オホトモノ）」歌であると述べてきた。本稿で示した校訂私案「御津の白浪なる御有り様」は、写本に「水の白浪」と表記する例が存在したために本文理解の主流になりづらかったケースであったため、これまで見出されなかった解釈といえる。なお、稿者私案を踏まえる場合の解釈については、既に述べたとおりである。私案の是非については大方の批正を庶幾するばかりである。

ところで、かつて稿者は写本の表記情報を手掛かりに表現の典拠論明を実践したことがある。[13] 典拠に指摘される漢詩句の一部と同じ表記を有する写本が存在したこともあり、原拠詩を見出すこと自体にさほどの困難はなかった。だが、本稿で取りあげた事例は、鎌倉期には既に「みつ」と「水」の二通りの本文理解が存在していた。そのうえさらに、「御津の白浪」も、「水の白浪」も和歌に詠まれる歌ことばであった。両表現ともに歌ことばであったがために「水のしら浪なる御有さま」の一文の理解は定まりづらく、正確な解釈を決することが難しかったと予測される。それこそ、たとえば「水の白浪」は歌語として多出するが、「御津の白浪」とあるケースは数少ないという表現史上の問題も如上の予測と関係しよう。用例の多寡は本文理解とは全く異なるものであること、各研究者は改めて肝に銘じておいた方がよいだろう。

写本ごとに伝わる表記情報に着目し、本文を検討する向きは必要であると考える。だが、表記情報ばかりを手掛か

りに本文読解を行えば、当て字や清濁の区別に因って、いとも簡単にその本文理解に違いが生じてしまい、解釈がぶれる恐れのあること、本検討からも知られたであろう。近年の古典文学研究はとかく著名な研究者の手になる校訂本文に依拠する検討ばかりである。活字本に拠って行われる研究が本質的に抱え込む研究上の問題に自覚的でなければ、作品研究は一向に進むまい。数多の写本を渉猟し、さまざまな形態の本文を検討の俎上に載せる研究姿勢が平安朝文学研究には肝要なのである。

［注］

（1）本文は、三谷榮一『平安朝物語板本叢書2　狭衣物語（下）』（有精堂、昭和六一年）に拠る。なお引用のさい、原本の表記を尊重し、仮名に漢字を宛てたり、逆に漢字を仮名に開いたりすることはしなかったが、清濁の区別、句読を切る、鉤括弧を付すなどの措置を私に施している。この措置は影印資料および紙焼き写真を利用し、本文を掲げる資料のいずれに対しても同様である。

（2）小町谷照彦・後藤祥子『新編日本古典文学全集　狭衣物語2』（小学館、平成一三年）。本稿では『新全集』と略称を用いて示す。

（3）引用は「日本文学Ｗｅｂ図書館」を利用し、『新編国歌大観』に拠った。なお、私家集を除く歌集からの引用も同書に拠る。

（4）引用は、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進『新編日本古典文学全集　栄花物語』（小学館、平成一三年）に拠る。以下、同じ。

（5）本文は、三谷榮一『平安朝物語板本叢書1　狭衣物語（上）』（有精堂、昭和六一年）に拠る。

（6）なお、「そのけしきをゆめにもおもひよるべくもあらずもてなし給へり」（承応版本）とあった箇所が、深川本では「人はゆめにも思ひよるもなし」とあり、源氏の宮が動作主にならない点に違いが認められる。

（7）本稿では、以下に示す注釈書を確認している。以下、本稿における略称に続けて書名を記す。

『有朋堂』―『有朋堂文庫』（有朋堂書店、大正一〇年）。『全譯』―吉澤義則『全譯王朝文学叢書　狭衣物語下』（全譯王朝文学叢書刊行会、大正一三年）。『大系』―三谷榮一・関根慶子『日本古典文学大系　狭衣物語』（岩波書店、昭和四三年第三刷）。『全書』―松村博司・石川徹『日本古典全書　狭衣物語下』（朝日新聞社、昭和四二年）。『集成』―鈴木一雄『新潮日本古典集成　狭衣物語下』（新潮社、昭和六一年）。

（8）たとえば篠崎五三六は「引歌と狭衣物語」（「國語國文」第四巻一一号、昭和九年一一月）にて、後述する『狭衣下紐』説を引く『有朋堂』の問題を指摘し、『狭衣物語抄』説を挙げたうえで、これに従うと見る『全譯』の見解を精査し、解釈の不備を正している。しかし、引歌と認定される和歌そのものの再検討は行わない。

（9）参看した古注釈書は、次のとおりである。以下、本稿における略称に続けて書名を記す。
『下紐』―三谷榮一『平安朝物語板本叢書2　狭衣物語（下）』（有精堂、昭和六一年）、『文談』―奥田勲「常磐松文庫蔵『狭衣文談』影印（四）」（「実践女子大学文芸資料研究所年報」一七巻、平成一〇年）、『校注』―ノートルダム清心女子大学古典籍叢書刊行会編『狭衣物語校注』（福武書店、昭和五九年）、『狭衣抄』―『狭衣物語抄』（川崎佐知子『『狭衣物語』享受史論究』思文閣出版、平成二二年）。

（10）『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、平成九年）に拠る。以下、同じ。

（11）本稿で参看した鎌倉写本は以下のとおりとなっている。伝本名を掲げたのち、その出典を記す。なお、今回は鎌倉末期から南北朝期書写と考えられる清範本も鎌倉写本群に含め、その本文を掲げた。
為定本―『古典聚英　狭衣物語　下（深川本）』（古典文庫）、為家本―『古典聚英　為家本』（古典文庫）、保坂本・慈鎮本・為明本―『狭衣物語諸本集成』（笠間書院）。為秀本―『静嘉堂文庫蔵物語文学書集成』（雄松堂マイクロフィルム）。松浦本―（天理大学附属天理図書館デジタルプリント）。為相本―紙焼き写真、清範本―『狭衣物語諸本集成』四巻（笠間書院）。

（12）本文をいちいち掲げはしなかったが、以下に示す伝本群を確認している。伝本名に続けて、その出典を示す。
京大五冊本・内閣本―紙焼き写真。紅梅文庫本・飛鳥井雅章本―『狭衣物語諸本集成』五巻・六巻（笠間書院）。九条家旧蔵本―『九条家旧蔵本　狭衣物語と研究（下）』（未刊国文資料刊行会）、蓮空本―『古典文庫』（古典文庫）、神宮文庫本―萩野敦

子「神宮文庫本『狭衣』翻刻・巻四」（「琉球大学教育学部紀要」六六巻、平成一七年二月）、『狭衣文談』―注（９）掲出『文談』に同じ、宇和島伊達文化保存会本―紙焼き写真、龍谷大学本―「龍谷大学図書館　貴重資料画像データベース」（http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html）の公開画像、九大細川本―九州大学附属図書館（九大コレクション）公開画像、実践女子大学蔵常磐松文庫蔵中臣祐範奥書本・寛佐奥書本・黒川一二冊本―『実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ物語史研究の方法と展望』収録のＣＤ－ＲＯＭ（実践女子大学文芸資料研究所、平成一一年）。鎌倉本―山岸徳平『鎌倉市図書館蔵　狭衣物語』（古典研究会、昭和四四年）。

（13）小林理正「『狭衣物語』出典未詳表現覚書―「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を取りあげて―」（大阪大学古代中世文学研究会「詞林」六九号、令和二年四月）。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

An Interpretation of the sentence "Mizu no Shiranami naru onarisama" (*The tale of Sagoromo* Vol.4)

Tadamasa Kobayashi

The tale of Sagoromo Vol.4 is an 11th century Japanese monogatari(tale).In this thesis, We investigate the sentence "Mizu no Shiranami naru onarisama" (*The tale of Sagoromo* Vol.4). Several previous studies indicate that poem No.682 *Kokinshu* is the source of "Mizu no Shiranami naru onarisama(Hikiuta)". However, what seems to be lacking in these studies, are notations to support these claims in the manuscripts. In order to interpret these texts, it is therefore important that we point out such notations in manuscripts.

The main purpose of this thesis is to reinterpret "Mizu no Shiranami naru onarisama" and to re-investigate Hikiuta.